

研修会記録

「基礎ゼミナール」の共通理解を深める

- 第2回弘前大学ワークショップ -

弘前大学の教員が自ら授業改善を図るために、平成17年6月11日(土)から1泊2日で、下記の趣旨と内容の第2回弘前大学ワークショップが行われました。場所は落合温泉「ホテルちとせ屋」、主催は21世紀教育センター、共催は教育・学生委員会で、26名の教員が参加しました。

【趣 旨】

大学での「学び」の基本的スキル取得を意図して導入された「基礎ゼミナール」担当者を対象に、その共通理解を深め、「能動的学習」を促進する授業方法について考え、効果的なシラバスを作れるようにする。

【研修内容】

ミニレクチャーの後、A B Cの3つのグループ(5人)に分かれて3回の作業(60分)を行う。各グループはその作業成果を回毎に全体発表し、質疑討論がなされる。この作業を通して授業の目的、学習方略、評価方法の3つの基本的要素を体験的に学ぶ。

具体的な作業の成果発表、質疑応答を以下に報告します。なお、このワークショップでは「基礎ゼミナール」の共通理解を深め、能動的学習を促進するためのシラバス作りが出来るようにすることが目標となっていますが、各グループには下記の授業設計をする際の方針が与えられました。

Aグループ コミュニケーション能力を高める

Bグループ 異文化理解を深める

Cグループ 学問や社会の多様性の理解を深める

発表と質疑応答

(全体発表は回毎にA, B, Cの順が一つずつずらされて行われましたが、ここでは分かりやすいように順を変えません。)

作業 課題：「授業の副題と目標」を設定する。

Aグループ

副 題 議論の力を高める

- 目 標
- 1 与えられた課題をきちんと理解できる。
 - 2 その課題について適切なりサーチができる。
 - 3 自分の意見を分かりやすく発表することができる。
 - 4 他人の意見を誤解することなく、正しく理解できる。
 - 5 他人の意見に対して自分の意見を述べ、適切に批判できる。

以上を通して本学「基礎ゼミナール」での5つの目標「自主的な学習態度を形成」、「課題発見能力を高める」、「資料の検索・収集・整理に関する基本的技能の習得」、「学生と担当教員、および学生相互におけるコミュニケーションの場を作り出す」のすべてを達成できると考える。

質疑応答(一部)

Q:「与えられた課題を理解できる」というが、どういう課題であるかが重要になるのではないか。

A:最初は簡単な「弘前大学は云々」、次にはメディア等で身近な話題を拾って、それを課題にすべきと考える。

Q:与える課題の量が問題である。与えすぎると「課題発見能力を高める」という目標と齟齬を来すことにならないか。

A:最初の何回かに与える課題はきちんとしたものにしてトレーニングを行った上で、その後は自分たちで課題を設定するという方針である。

Q:行動目標に具体性がない。一般目標になっているのではないか。

A:特定の学部・学科を想定したものではないので、このようにせざるを得ない。

Q:グループには「コミュニケーション能力を高める」という授業設計方針が与えられているが、基礎ゼミというのはそもそも議論を重ねて積み上げてゆくことも目的になっている。そうした普通の基礎ゼミの目標との明らかな差はどこにあるのか。

A:基礎ゼミに「コミュニケーション能力を高める」というテーマを掲げることで、既にその他のものと差別化がなされている。

Bグループ

副 題 自分以外の存在との対話を試みる

一般目標 人と人との関わりを理解するために異なった文化を認識する。

行動目標 1 他者の存在を認識することができる。

2 地域、芸術、歴史等を通して異文化を認識する。

3 文化の異同を指摘する。

4 文化間の違いについて発表できる。

質疑応答(一部)

Q:行動目標は漠然として抽象的である。行動目標は評価に直結する形で立てなければならないと思う。

A:15回分の授業の中身を考えることは今回の作業に求められていないので、このようにならざるを得ない。作業に「見直し」も入っているので、この形でも今は意味がある。

Q:異文化の「認識」という言葉が出ているが、「理解」と「認識」の違いは何か。

A:「理解」は「認識」の後に来る。異文化の存在を先ず認識して、そこから自分でアプローチしていくのが理解につながると思う。

Cグループ

副 題 環境問題を通じて学問と社会の多様性を 知る

一般目標 自己と他者の意見を理解し、自分の意見を確立する

行動目標 1 一つの問題に対して異なる学問のアプローチがあることを知る。

2 一つの問題に対して異なる意見があることを理解させる。

3 問題に公的側面と私的側面があることを考える。

4 問題の公的側面と私的側面の意見を調整することの重要性を理解する。

5 多様性を知りながら自分の意見を確立する。

質疑応答(一部)

Q:一般目標の中の後段で「自分の意見を確立する」とあるが、自分の意見を確立していないのにどうして前段で自分の意見を理解することができるのか。「自己と」が余分ではないか。

A:高校を卒業したばかりの学生を考えると、未だ自己と他者の区別がはっきりしていないと思う。他

人の意見を理解するというプロセスを経て、再度自分を見つめ直して欲しいという意味でこのように表現した。

Q：一人の教員がこのような基礎ゼミを行うのは不可能ではないか。

A：オムニバス形式の基礎ゼミは学生主体の共同研究という形では可能と思う。

3 Aグループ

目標1から5に関して以下の手直しをする。1「・・・課題を理解・・・」、2「・・・適切なリサーチ・・・」、3「・・・わかりやすく発表・・・」、4「・・・聞いて良く理解・・・」、5「・・・適切に批判・・・」。

授業内容

- 1回 「ディベートの仕方を知る」 - ビデオ供覧
- 2回 「ディベートのルールを知る」 - 講義
- 3回 「ミニディベートをする」 - 論題：例「弘前大学は入試を廃止すべし」
三角ディベート(肯定、否定、判定の三者が3回役割を交替して行う)
- 4・5回 「論題の選択」 - 学生に興味のあることを発表させ、論題を決定させる。グループ分け。宿題としてリサーチ。
- 6・7回 「ミニリサーチの発表」
- 8回 教員あるいは教員以外の専門家の講義
- 9・10回 「論題のディベート練習」。リサーチ。
- 11回 「追加リサーチ(教室外)」
- 12~14回 「グループ対抗ディベート」
- 15回 反省会。レポート。

質疑応答(一部)

Q：行動目標に比して授業内容はディベートに偏りすぎている。これでは文献収集の仕方やレポート作成の方法についての指導ができないのではないか。

A：4・5回で論題が決まった後にリサーチをすることになるが、その時に講義をしようと思っている。

Q：12~14回のディベートは各グループで決めた論題について行うのか。

A：論題は一つであり、3グループが肯定派、否定派、審判の役割を交替で担う。

Bグループ

授業内容

- 1回 自己紹介とオリエンテーション
- 2回 図書館案内
- 3回 グループ分けをする。県民性の違いについてをテーマとする討論。
- 4回 レポートの書き方 - 前回の討論に関する レポートを課題とする(手書き)
- 5・6回 第1回のオリエンテーションで与えておいた出身地の歴史と産業についてのレポート(ワープロ)を提出、OHPを作成、ディスカッション実施。
- 7回 工業試験場見学
- 8・9回 塗り物、宗教等に関する幾つかのテーマを与えて文献検索
- 10・11回 テーマ設定のための調査
- 12・13回 テーマ決定。テーマに基づいてパワーポイントでファイル作成
- 14・15回 異文化の生まれる背景に関するレポート発表とディスカッション

質疑応答(一部)

Q：最初に地域性に基づく産業との関わりについて基礎的な学習をして、次の段階で宗教についてテーマが移るとのコメントがあったが、その趣旨は何か。

A：先ず他と自己を区別させるために地域性から入り、さらにグローバルな観点で異文化を捉えていくという構想から出ている。

Q：異文化理解に対して教員は学生にどのような期待を持っているのか。

A：例えば塗り物に関して言えば、地元のものとは他県のものとは存在するが、それらが生まれてきた文化的背景について認識できるのではないかと。

Q：3回目の授業で県民性の違いについてディスカッションがなされるが、雑談に終わる可能性もあり得る。それを防ぐ手だてを講じるのか。

A：1回目の授業で自己紹介をさせるが、この時に同時にペーパーも書かせておく。それに基づいて共通して関心のあることを中心にしたグループ分けを行うつもりである。

Cグループ

第1回発表「一般目標」の「自己と他者の意見を理解し、」を「自分と他人の意見を理解し、」に4読み替える。また、学習方略も「地球温暖化問題を通じて学問と社会の多様性を知る」と手直しをする。

授業内容

- 1回 オリエンテーション。4つのグループ分けと4つの課題提示
- 2～4回 教員講義：自然科学的・社会的アプローチ、国際的取り組み方法
- 5～8回 4学生グループ研究発表(40分)；質疑応答・討議；レポート発表
- 9回 エネルギー施設見学
- 10～13回 温暖化問題に対する各国・各地域の対応(学生グループ研究発表)
- 14回 全体討論、個人の意見発表
- 15回 レポート作成

質疑応答(一部)

Q：文献検索とレポート作成の指導が不十分に思われる。

A：1回目のオリエンテーションでじっくりと教えたいと思っている。

Q：時間内に見学できるエネルギー施設は近くにあるのか。

A：別に時間を設けるつもりでいる。

Q：「環境問題」から「地球温暖化」に的を絞ったが、グループ内での討議内容を紹介してもらいたい。

A：「環境問題」ではあまりに範囲が広すぎるので学生が困惑するであろうという理由からである。

Q：レポート作成は授業時間内に行われるのか。

A：各研究発表を聞き、意見を交わし、その結果として自分はどう思うかがレポートになる。

Q：グループ発表は毎回行われるのか。

A：例えば第5回ならば自然科学的アプローチを課題とした1グループだけが発表する形でなされる。

作業 課題：「評価方法を考える」**Aグループ**

前回の授業内容に少し手直しを加えた。レクチャーで中間時のフィードバックの必要性が分かったので、3回目の授業が終わった段階でミニアンケートを行って学生の反応をみることにした。さらに4・5回目の後に「リサーチの方法」という講義を行い、引用等についても詳しく指導したい。

評価方法

- 1 グループ評価項目
 - 勝敗：各10点、計20点
 - ジャッジの適切さ：10点
 - ミニリサーチのレポート：20点
 - 小計50点
- 2 個人評価項目
 - ディベートにおける発表・討論：30点
 - 最終レポート：20点
 - 小計50点

質疑応答(一部)

- Q：ジャッジの適・不適切とディベートの勝敗はどのように関係するのか。
- A：勝敗は説得力がいかにあるかが重要であり、ジャッジの適切さとは無関係である。但しジャッジの適・不適切も評価にはいることを予め申し渡しておかねばならない。
- Q：個人がいくら頑張ってもグループが2敗すると80点にしかならない。
- A：コミュニケーション能力を高めるのが目標になっているので、グループ活動の評点も敢えて高くした。
- Q：最終レポートには何を書くのか。
- A：ディベートの議論を踏まえた上で、自分の個人的意見を内容とする。

Bグループ

シラバスへのフィードバックとして レポートの返却、 ディスカッションへのコメントを考えた。

評価方法

- 1 出席状況：10%
 - 2 資料収集(検索方法、データの評価、結果の整理): 15%
 - 3 レポートの書き方(a問題提起、b論理展開、c結論の提示、aとcとの整合性、e書き方のルール): 20%
 - 4 プレゼンテーション(資料の作成とその利用、発表態度、質疑応答の巧拙): 20% 5
 - 5 見学会(質問の提出と回答): 15%
 - 6 ゼミテーマの理解(文化間の違いを捉えたか、違った文化が生じた背景を理解できたか): 20%
- 備考：1 出席は2 / 3以上のこと。
- 2 レポート、プレゼンテーションでの剽窃は課題未提出扱いとする。

質疑応答(一部)

- Q：フィードバックのためにレポートにコメントを付して返却するとのことだが、どのような内容のコメントとなるのか。
- A：論の展開、引用の仕方等、レポートのルールについて指摘するコメントである。また異文化の違いを的確に捉えているかも内容となる。
- Q：備考2の「課題未提出扱いとする」とあるが、再提出を求めることはないのか。
- A：提出を求める幾つかのレポートには期限がある。期限切れのレポート提出や引用の不適切なものは未提出扱いにする。
- Q：剽窃は何故いけないのかを注意・指導する必要がある。

Cグループ

前回の作業 の結果発表に関して次のように変更したい。5～8回と10～13回の学生グループの発表

は1回につき1グループが行うとしていたが、第5回に各グループにテーマと重点の置き方について10分ずつ発表させる。それに対する質疑応答に5分、レポート・感想作成に20分、教員コメントに10分という時間配分で行う。第6回には前回の指摘を受けてどのように直したかについて報告してもらう。第7・8回は各2グループがそれぞれの回に20分かけて最終発表をし、それに関する質疑応答を行う。10～13回についても同様の形で行う。

評価方法

- 1 課題調査・発表（学生の評価も含めて判断） 25%
- 2 レポート作成（全レポートの評価） 25%
- 3 授業参画態度（質疑応答・個人の意見表明）25%
- 4 出席状況 25%

備考：レポートは自分の考えを自分の言葉で記すこと。公表されている資料を引用先明記なしで使用した場合は不可とする。

質疑応答(一部)

Q：「地球温暖化問題」というテーマをどのように理解したかが評価の中に入っていない。

A：どのように考えたかはレポートの中に記されている。

Q：課題調査・発表に学生の評価も取り入れるとなっているが、どういう形で行うのか。

A：アンケートを行う。

Q：グループ発表と課外調査における個人的貢献度をどのように評価するのか。

A：グループ発表の評価は同じ点数にならざるを得ないが、質疑応答・個人の意見表明に貢献度は現れてくるので、アンケートにそれが反映される。

Q：授業参画態度と出席状況とを区分しているが、出席がなければ前者も評価ができない。

A：出席状況は純粋に出・欠席で判断するが、もちろん遅刻等も評価に含まれる。

参加したほとんどの教員にとって、授業設計を主題にしたワークショップは初めての体験でした。最初の段階ではとまどいも見られましたが、作業が進むにつれてどのグループでも活発な議論が行われました。専門的知識や経験をふまえて出される多くのアイデアが、互いを刺激しあったことによるようです。教員同志で話し合うことが授業の設計や改善に大いに役に立つことを実感しました。

今回のワークショップの参加者は全員、今年度基礎ゼミナールを担当している教員です。作業の合間に設けられたコーヒープレイクや夜の懇親会の場では、基礎ゼミナールをはじめとする21世紀教育の授業について、様々な意見交換ができました。新しいアイデアもたくさん生まれたようです。この経験は今後の授業に活かされるに違いありません。

(註：『21世紀教育センターニュース』第7号(平成17年9月)より転載したのですが、写真は除いてあります。)